

〔中国の絵画展によせて〕

## 伝毛益筆蜀葵遊猫図・萱草遊狗図をめぐって

## — 東洋における動物画の一系譜 —

宮廷の中の庭園でしょうか、太湖石のそばで親子の猫や犬が戯れています。この「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」は南宋時代の画院画家である毛益の伝称をもち、古くから日本に伝存したものです。現在の表装は異なっていますが、江戸時代狩野派の模本があり（東京国立博物館）、少なくともその頃には対幅として扱われていました。筆者とされる毛益は、南宋・孝宗朝の乾道年間（1165～1172）に画院待詔で、父の毛松と同様に花鳥画を得意としました。日本では麝香猫・犬・虎といった動物画や鶏などの花鳥画の筆者としてその名が多く見受けられ、この双幅における毛益という伝称も、動物をモチーフとした南宋院体画といった意味でしょう。画中の動物の毛描は共に精妙で、猫は色彩がやや厚く塗られ、白色などの色彩線でのふさふさした感じを表わすのに対し、犬の彩色はやや抑えられ、毛描も墨線が中心です。こうした対比は猫と犬の性格を描き分けるためと考えられます。さらに、この図には吉祥図としての意味が隠されています。「猫蝶」は「耄（70歳）壽（80歳）」に音が通じることから、

モンシロチョウが飛び、猫が戯れる「蜀葵遊猫図」は長寿を祈願する意味が込められています。清時代の「耄耋図」（北京・中央美術学院）はこうした図様が意味を伴って延々と継承されたことを示しています。

毛益の伝称を持つ小画面の動物画は「秋庭乳犬図」（上海博物館）など数例ありますが、中でもこの2図は画犬・画猫の伝統において非常に重要な位置を占めています。動物の群像のパターンとして捉えられるなら、例えば、戯れ合っている子猫、寄り添って眠る子犬が対応しており、それらがそれぞれ親と共に描かれています。この組み合わせは親子の犬・猫を描く上での一定型と考えられます。また、蝶を見上げる子猫は後ろ向きで、おけらに悪戯しようとする子犬と呼応するように描かれたのですが、画家にとってその形姿は描きにくかったように見受けられます。

15～16世紀の中国・韓国・日本では、この双幅に見られるような南宋院体画を典拠として動物画が

制作されました。

中国・明時代の紀鎮「春苑遊狗図」（黒川古文化研究所）は宮苑の一景で、戯れる子犬とそれを見守る親犬が描かれています。その画風などから、紀鎮は呂紀に影響を受けたほぼ同時期の画院画家と考えられます。伝毛益画のような小画面を拡大した点では共通しています。

韓国・朝鮮時代前期の李巖（1499～1545以後）は、日本では「完山静仲」の名で知られ、狩野永納（1631～1697）『本朝画史』巻3では室町時代の画家として、「彩色狗子を善く書き、宋の毛益に学ぶ」とあります。「花下狗子図」（日本民芸館）では、寄り添って眠る二匹の小犬とやや大きめの犬が描かれています。江戸時代の画家、俵屋宗達の「たらし込み」の源流の一つとも指摘される、墨面を多用した犬の描写より、山桜の花木や蝶の表現に院体画からの影響が顕著に認められます。「双狗子図」（個人）や「花鳥狗子図」（京畿道・湖巖美術館）はそれをやや省略化したもので、「花下猫狗図」双幅（平壤・朝鮮美術博物館）は猫・狗の愛らしい仕草が多く盛り込まれています。これらはのどかな光景で、身近な動物の愛らしさがより強調されています。

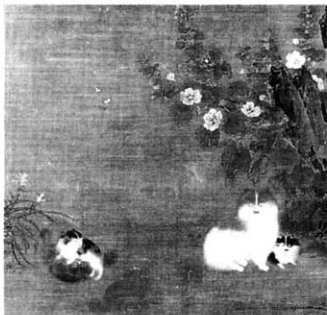
日本・室町時代では、この犬猫

たちを麝香猫という、実在のジャコウネコとは異なる、犬と猫が混ざったような形姿の靈獣として受け入れました。『蔭涼軒日録』永享8年（1436）5月30日の条には「毛益麝香絵四幅」とあり、伝毛益画を麝香猫の絵と見做していたことが分かります。狩野派には麝香猫図が多く認められ、『宝山誌鈔』には、大徳寺興臨院方丈札の間の襖絵として狩野元信（1476～1559）の「彩色花鳥麝香」が見出せます。伝狩野元信「麝香猫図」双幅（カリフォルニア大学附属パークレー美術館）や伝狩野元信「麝香猫図」（ボストン美術館）、狩野元信「花鳥図屏風下絵」（1548年、個人）中の「麝香猫図屏風」、元信の次世代としては狩野雅楽助「松下麝香猫図屏風」（サントリー美術館・ボストン美術館）や狩野玉榮「麝香猫図」（パーク・コレクション）などがあり、これらの形姿は伝毛益画の猫・犬に非常に近いものです。これらは皆、異国の地に棲息する靈獣を自然景の中に描き出しています。

中国の紀鎮・韓国の李巖・日本の狩野元信は15～16世紀の東アジアでほぼ同時期に活躍しました。伝毛益画双幅はまさに彼らの動物画の祖型が南宋院体画にあったことを示しており、その意味で中・韓・日三国の動物画の交差点といえましょう。そして、同時に、それぞれが興味深い差異を示しており、それは東アジアにおける動物画の共有と差異の諸相の一面を表わしていると考えられます。

（板倉聖哲）

蜀葵遊猫図 伝毛益筆



春苑遊狗図 紀鎮筆



花下狗子図 李巖筆

麝香猫図双幅 伝狩野元信筆



季刊 美のたより No.121

平成9年11月14日

発行 大和文華館